

A misty forest landscape with a lake in the foreground. The background shows rolling hills covered in dense green trees, partially obscured by a light mist. The foreground is a calm body of water reflecting the surrounding greenery.

弥生 vol.17

夢

令和2年1月発行 弥生神社

- 
- 02 バスに乗って 森 岳人
- 03 神の意を伝える夢 加瀬直弥
- 05 スフィンクスと砂の夢 和田浩一郎
- 08 つわものどもが夢のあと 林 道子
- 09 吉夢来福 玉井ゆかり
- 11 蚕の神様を訪ねて (五)「蚕影信仰は夢のお告げから始まった」 谷口悌三
- 13 本を読む「夢」 小河洋友
- 14 旅の止まり木・9 「花椒の夢」 谷口明子
- 15 トルコ女性の手仕事 上岡和江
- 17 沖家室島より 「魚名にみる瀬戸内の源平合戦」 松本昭司
- 19 山の時間 「シズさんのこと / ヤスエさんを悼む」 中村政子
- 21 植物紀行 「金柑」 荒谷 渚
- 22 弥生神社 宗教・文化講座
- 25 季節のレシピ 「黒糖牛蒡ういろう」
- 27 授与品のご案内・編集後記

# 夢

# バスに乗って

森 岳人（書籍編集者）

早く行かなければならないというので、満員のバスに乗り込んだ。バスが終点に着いたときには、あたりはもう暗くなっていた。トタン張りの粗末な建物の前で降ろされると、皆、バスの上に積んである荷物を降ろしはじめた。しかし、最後の荷物だけは、なにかに引っかかって、なかなか降ろせない。少し離れてバスの上を見てみると、3メートルくらいの大きな金太郎が寝ていた。誰がこんなの連れてきたんだ。だからバスのスピードが出なかったのか。でもなぜこのバスに乗ったのだろう（逃げて来たのだ。何から？）。どうしたらよいか迷っていると、バスに乗ってきた者たちは建物に入って、「お前も早く隠れろ！」と言う。とにかく身を隠さなければならない（何から？）。暗闇を進んで建物の裏に回ると、そこは空港だった。皆、当たり前のように飛行機に乗り込み、すぐに飛び立った。

機内のテレビには外国のニュースが流れており、それについて皆話しあっていた。しばらく経つと、わたしはある仕事を命じられた。「宮殿に侵入し、〇〇を奪え」。〇〇は聞いたことがない外国語でよくわからなかったが、とりあえず飛行機からパラシュートで地上に降下した。宮殿の敷地にうまく乗り込むと、そこにはエディー・マーフィーが待っていた。しかし顔を見るなり「お前は右から行くから、お前は左から狙え」と言い残し、拳銃を構えて行ってしまった。わたしは丸腰だった。

階段の陰から様子を窺っていると、「あなたそこにいるの覚えてますわよ」と上から声が聞こえてくる。観念して立ち上がると、デヴィ・スカルフ夫人が笑いながら近づいてきた。彼女は警備員を呼ぶわけでもなく、わたしをパーティー会場に連れていき、「欲しいのはこれではありませんの？」と〇〇を渡してくれた。礼を言っただけはすぐにその場を去った。とにかく逃げなければ——なぜかそう身に迫るものがあった。誰が敵なのかもわからず身を隠しながら、走って走って、なんとか飛行機に戻ることができた。

機内のテレビでは、デヴィ夫人とジャッキー・チェンが戦っていた。本当はわたしが戦はずだったのだ（どちらど？）。むかし、ヤツと戦ったことを思い出した（なんで戦ったんだ？）。ふと目を落とすと、手に入れたはずの〇〇はもう持つてはいなかった。誰かに渡したのか、どこかで落としたのか。窓から外を覗くと、大きなきこ雲が見えた。きつと〇〇が爆発したのだ。その光景を見ても、悲しむべきなのか、喜ぶべきなのか、よくわからなかった。「以前、こんな夢を見たことがあったな」とは思ったが、夢でもなかった。

もうわたしは疲れ切っていた。ウトウトしていると、飛行機の騒音の中から電車が走る音が聞こえてくる。きつと始発だな。もっと寝ていたい、そろそろ目覚まし時計が鳴るだろう。疲れているのに今日もよく眠れなかったな。でも起きなければならぬ。

——いつものようにスマホの目覚ましメロディが聞こえてきた。

（文／もり・たけこ）

# 神の意を伝える夢



大物主神の坐す三輪山（奈良県）

加瀬 直弥（神道学）

古代の日本の人々は、きつと多くの現代人よりも神の意を真剣に受け止めていたであろう。では、神の意はどのように示されると考えていたのであるうか。現代の創作でしばしば描写されるような、「神がこの世界に生身の姿で現れ、直に人に示す」といった伝承は、古代でもなくはない。ただそれは、少なくとも主流とはいえない。神の意の示し方は他にもいくらかあると考えられていた。道具を使つたうらない、託宣、そして夢告がそれにあたる。

まずは道具を使つたうらないである。具体的には獣の骨や亀の甲羅を用い、その焼け具合で神の意を判断するもので、人の求めで簡単にできる手段だといえる。だが、やっても分からない場合もあつたとされ、その信用度も高くなかつたようである。宮廷内で亀甲による亀卜きぼくの儀式が確立されていた平安時代には、怪異現象の原因を突き止めるに当たっては、天体の動きなどであらう陰陽道の技法も同時に実践されていた。

次に託宣たくせんである。ここでいう託宣とは、神が人にのり移り、そのことばで神の意が人に伝わる体のものを指す。神の側が能動的にのり移つたとされる場合もあるが、人の側の発意で、特定の人に神を憑依ひょういさせ、その意をうかがうケースもあつたようである。だが、この託宣、神の意を受ける人の素性が信憑性しんひょうを左右していたのか、これも平安時代になると、みだりに託宣を広める者は罰されるようになった。

いよいよ本題の夢告だが、これは夢中に神が現れその意を伝える形式である。いくらかの伝承は、まつりを始めるなどの決め手に夢告がなったとしている。

その中でも最も知られているのは、『日本書紀』などに示された崇神天皇への夢告であろうか。その筋書きは次のようなものである。

：天皇の治世初期は国が治まらず、疫病で人が死に、国内が不穏になった。それに対し、天皇は神々をまつろうと考えた。そして、災害の原因を探ろうとしてうらないをすると、託宣が下りた。その神は自らをまつれば平安になるとし、自らの名を大物主神と告げた。

天皇はそれに従い、まつりをしたところうまくいかなかった。そこで天皇は身を清め、自らの夢での教示を求めた。すると、夢の中でひとりの貴人が現れた。大物主神である。そして、自らの子の大田田根子にまつらせれば、国は平安になるとした。その後天皇は大田田根子を探し当てまつりをさせ、結局は問題を克服した。：

この伝承は、夢告が託宣よりも―当然、他の手段よりも―、神の意を的確に知る上で有用であったように描写されている。願いに直接示されるといふ特色が、その重みを増したのであろう。こうした夢告の重みは、奈良時代でも国の行く末を左右する際に

も考慮された。夢告を受けたのは称徳天皇であった。時の宮廷では、豊前宇佐宮の八幡神が現地で示したとされる神の意に注目が集まっていた。天皇近臣の僧道鏡を皇位につけよとのものである。

この一件、現地へ赴いた和氣清麻呂によって神の真意が皇統護持にあると確かめられ、道鏡の野望は潰えたのだが、一旦示されたはずの神意を確かめに清麻呂が赴いたきっかけは、称徳天皇の夢であった。八幡神の使いが来て、言いたいことがある旨の、神の意を伝えたのだという。当事者に直に示される夢告の重みは、現実の政治をも左右したのである。

ところで、先の大物主神の伝承では、自ら夢告を受けた崇神天皇は直ちに行動に移さなかったとされる。移したのは後日、三人の臣下から夢告に関する報告を受け、その内容が同様だったことを確かめてからだという。「神意の夢告は疑いなく信じなければならぬ」とまでは、古代の人々でも考えていなかったようである。夢告といえど、その検証は必要であった実態を示唆している。(文・写真／かせ・なおや)

― 加瀬 直弥 著作 ―

『古代の神社と神職 神をまつる人びと』(吉川弘文館、平成三十年)

『日本神道史』(共著、吉川弘文館、平成二十二年)

# スフィンクスと砂の夢



和田浩一郎  
(エジプト学)

大スフィンクス 前脚の間に夢の石碑が立っている

古代エジプト人にとって夜は、世界を創造した太陽神が地上から姿を消し、世界の境界が曖昧になる時間だった。そのような時間帯に眠りに落ちることによって、人はこの世ではない所にすむ神や死者の働きかけをうけ、なんらかのイメージを見ることがあった。これが夢の正体だと古代エジプト人は考えたらしい。つまり彼らにとって夢は、あくまで見せられるものであり、人の意思によって変えられるようなものではなかったのである。

他方で夢見は、神や死者が関与するものだったので、そうした超自然的存在からのメッセージが込められているものとも考えられた。古代エジプトの夢をめぐるエピソードでもっとも有名なのは、前四〇〇年頃の王トトメス四世がギザの大スフィンクスの前に建立した、通称「夢の石碑」に刻まれた物語だろう。

トトメスがまだ王子だった頃の話。王子はギザの砂漠をそぞろ歩いていた。歩き疲れた疲れた彼は正午近くに、大スフィンクスが作る影に身を横たえた。すると夢のなかに大スフィンクスを化身とする太陽神ホルエムアケトが現れ、「私から砂漠を除けば、神々から伝わる上エジプトの白冠と下エジプトの赤冠を与えよう」と言った。当時の大スフィンクスは長年にわたって吹きつけた砂に埋れており、ほとんど頭だけが砂上に出ているような状態だったのである。目覚めたトトメスは神の意志を悟り、言葉どおりに大スフィンクスの周囲から砂を除き、日乾レンガの壁をめぐらした。この功績によって王子はエジプト王になることができた。というのが石碑に記された物語の概要である。

トトメス四世は昼に夢を見たことになるが、これは太陽神の化身である大スフィンクスの影で、太陽の力もつとも強い正午に寝たためと解釈できる。つまり、太陽神の意思が通じやすい条件がそろっていたわけである。

トトメス四世の夢には政治的な意図があり、おそらく創作であるため明確なメッセージ性を持っているが、多くの夢はもつと断片的であ



夢判断のパピルス Courtesy of The British Museum

いまいだった。そこで古代エジプト人も、夢にどんな意味が込められているのかを読み取るうとした。紀元前一二五〇年ころにまとめられたと考えられる、夢判断のパピルスが残されている。体裁は現代の夢占いの本と同じように、夢で見たイメージがどんな未来を暗示しているのかを解釈する内容になっている。その解釈はイメージそのものから導き出されたものと、イメージと関連した言葉の語呂合わせによるものからなっている。パピルスの内容をすこし紹介しよう。

もし男が夢の中でロバ（アア）の肉を食べている自身の姿を見たならば：

吉 彼は偉大になる（サアア）であろうという意味である。

これは語呂合わせの例であり、アアを食べることでサアアになるというわかりやすい解釈になっている。

もし男が夢のなかで壁から落ちる自身を見たならば：

吉 争いの終わりを意味している。

個人的な経験としても、落ちる夢というのは不快なものである。ところがこの夢判断では、それを吉夢としている。解釈の根拠ははっきりしないが、壁が争っている相手との隔たりとみなされたのかもしれない。

もし男が夢のなかで矮人を見たならば：

凶 彼の命の半分が奪われるという意味である。

これはイメージとして、矮人の背丈が低いことと関係しているようだ。それに加えて、矮人が太陽神のシンボルのひとつであることに基づいた解釈と指摘する研究者もいる。つまり太陽は二四時間のうち、半分だけ地上に姿を現している存在なので、そのシンボルである矮人は半分の時間を暗示しているというのである。

人間は見る夢を選ぶことはできないが、神や亡くなった家族に困りごとの解決を嘆願した結果、成就のあかしとして夢を見ることがあると古代エジプト人は考えた。亡くなった家族への嘆願には、手紙を書くという手段があった。手紙はパピルスに書かれたものもあるが、より多く知られているのは供物を備える土器に書いたものである。供物の器に書いておけば、メッセージを見落とされることはないだろうという発想なのだろう。次に示しているのは、亡くなった妻に病気の回復を願う夫からの手紙の一部である。

見よ、私は地上におけるあなたの最愛の者、  
私のために戦い、私の名のために取りなしたまえ。

(中略)

あなたは私のために祝福されたもの(再生した死者の意)として現れるでしょう。

私は夢の中で私のために戦うあなたを見るでしょう。

太陽の光が昇ったとき、私はあなたのために(感謝の)供物を準備するでしょう。

古代エジプトには、夢をめぐるさまざまな史料が存在する。それらは不可思議で覚束ない夢の世界に小さな希望を見だし、日々の生活を私たちに伝えてくれる。洋の東西を問わず古くからあったことを私たちに伝えてくれる。

(文・写真/わだ・こういちろう)



矮人の像



死者への手紙が書かれた土器

一和田浩一郎 著

『古代エジプトの埋葬習慣』(2014) 株式会社 ポプラ社

# つわものどもが夢のあと

林 道子（写真家）



©Michiko Hayashi

Michiko Hayashi HP : <https://www.hayashimichiko.com/>

ニホンオオカミと狼信仰について興味を抱き、秩父や奥多摩を中心にサーチと撮影を重ね、手製本の写真集『Hodophylax : The Guardian of the Path』を制作、二〇一七年より一一一冊の限定部数で販売しております。その制作過程で、ニホンオオカミの頭骨などをお持ちの個人のお宅を訪ねて撮影させていただくことも度々ありました。あるとき、刀剣の縁を集めておられる川崎にお住いの方から「珍しく狼の凶柄のものを入手したので見に来ませんか？」とお誘いいただき、喜んで撮影に伺いました。

江戸後期のものらしいというこの縁頭。頭には、狼を避けるように、瀧の畔から馬が振り返っています。縁には、鳥を啜らせて意気揚々としている狼と、あわてて飛び立つ鳥の姿があり、肉厚に彫られています。恐ろしい獣のはずの狼も、とても生き生きと伸びやかで、お茶目な感じすら受けま

す。ひと目で魅了されました。

一体、どんな武士が注文し、どんな彫り師が細工したのだろうか。どんなときにこの縁飾りの太刀を帯刀したのだろうか。馬産地の東北の侍が、馬を襲わないでくれ、と願いを込めたのでしょうか。動物好きの彫り師は、狼を、悪さはするけど憎めないやつだ、と思っていたのでしょうか。来歴は定かではないというだけに、想像が膨らみます。

「夏草や兵どもが夢の跡」ふと、この句が思い浮かび、調べてみると、松尾芭蕉が奥州平泉の源義経の居城であった高館に登ったときに詠んだものということでした。なるほど、この縁頭から、東北の武士を連想したのも、何か縁があるようにも思えてきます。

奥州藤原氏や義経も、この縁頭の依頼主も彫り師も…そしてニホンオオカミも…「つわものども」がこの世から姿を消してしまつて久しいけれど。最近、また狼らしき獣の目撃談が続々と寄せられていると聞きます。なんとかニホンオオカミが日本列島のなかで生き延びていて、然るべき時が来たら、きつとふたたび、生き生きと伸びやかな姿を現してくれるのではないかと夢見ています。

（写真／文 はやし・みちこ）

# 吉夢来福

玉井 ゆかり (宗教民俗学)

毎日、必ずといっていいほど夢をみる。

胸の上に手をのせて寝ていると、これまた必ず悪夢―恐ろしい夢―をみることが長年の経験でわかっているので、床に着くときには極力注意する。それでも、目覚めたときに息が荒くなるほどの悪夢をみることもあり、そういう夢に限って妙に記憶に残って、一日の幕開けを不安にする。

睡眠について研究が進んでいる現代でさえ、夢についてわからないことはまだまだ多いらしい。昔の人にとって、夢は現代とは比べものにならないほど不思議で神秘的なものだっただろう。だからいつそう、よい夢をみたいという願望は強かったし、みた夢に意味を持たせて「占う」ことも盛んに行われたのだろう。

夢占い・夢判断の書物は、平安時代の初めにはすでに中国から日本に入ってきて、陰陽師によって宮中から宮廷の外へ広がっていったようである。ただし、庶民の間に夢占いの本が本格的に広まったのは江戸時代で、それらの中では、今のところ、正徳三年(一七一三)刊行の「諸夢吉凶和語鈔」が最も古いといわれている。幕末まで多くの夢占い書が刊行されている。

一年の初めにいかに縁起のよい夢をみるか。

「初夢」は、元日の朝、二日の朝、正月に初めにみた夢、など諸説があるが、二日の朝、三日の朝というのが現在では定着しているようである。もちろん、その日に夢をみなかったり、みても覚えていないことも多かったりするから、あまり厳密なものではない。

江戸時代には、縁起のよい初夢をみるために、図のような絵を枕の下に敷き、次の和歌(廻文になつてゐる)を三回唱えて寝たという。

「長き夜の遠の眠りの皆目覚め 波乗り舟の音の良きかな」

(ながきよの とおのねぶりのみなめざめ なみのりぶねのおとのよきかな)



「七福神宝船絵」葛飾北斎 (江戸東京博物館所蔵)

福神が龍頭の舟に乗り、恵比寿が鯛を釣り上げ、千年長寿の鶴が飛び、万年長寿の蓑亀が舟に乗り込もうとしているという、めでたいもの尽くしの絵である。廻文のマジナイ和歌も書かれている。

では、万が一、悪夢をみてしまったときはどうしたらいいのか。

子どもの頃、親に「バクが食べてくれるよ。バクにあげます、と言うんだよ」と教わり、上野動物園で初めてバクをみたときは、「このバクがこわい夢を食べてくれるのか」と、なんだかとても嬉しくなった記憶がある。



(写真右上) マレーバク

〈広島市安佐動物公園 website より〉

(写真左上) 猿の木鼻

京都市 北野天満宮三光門

〈いこまいけ高岡 website より〉

(写真左) 南天猿蒔絵枕：18世紀

大名家の婚礼道具。初夜儀礼に使われた。

〈東京国立博物館研究情報アーカイブスより〉



北斎漫画「猿」 葛飾北斎

〈国会図書館デジタルコレクション〉

宝船の絵を敷き、和歌を唱え、南天猿の絵も置いて、万全の備えをしてそれでも悪夢をみてしまったら：「この夢を猿にあげます」と唱えれば、悪夢転じて吉夢となる、はずである。(文／たまい・ゆかり)

悪夢を食べるといふ御利益は日本で付け加えられたらしい。江戸時代には猿の描かれた紙を枕の下に敷いたり、猿の絵を描いた枕を使ったりした。七福神の宝船の帆に「猿」と書かれた宝船絵も現存する。植物の南天（なんてん）も「難を転ずる＝なんてん」で、縁起ものとされたから、猿と共に描かれた。写真の箱枕の意匠が南天猿である。

猿は古代中国の伝説の「聖獣」で、邪気を払い悪鬼や病を避けるといわれ、その姿はこれまた諸説があるが、日本にも伝えられた書物によれば、象の鼻・犀の目・牛の尾・虎の脚を持つという。動物のバクは伝説の猿に似ているためにこの名がついたという。日本でも猿は邪気を払う神聖な生き物と考えられ、寺社建築の「木鼻」にもたくさん彫刻された。象の木鼻と似ているが、木鼻の猿は耳が小さくて立っており、目も丸く、巻き毛で、前脚が獅子のように表現されているところが象と異なる。

# カイコ 蚕の神様を訪ねて

谷口悌三

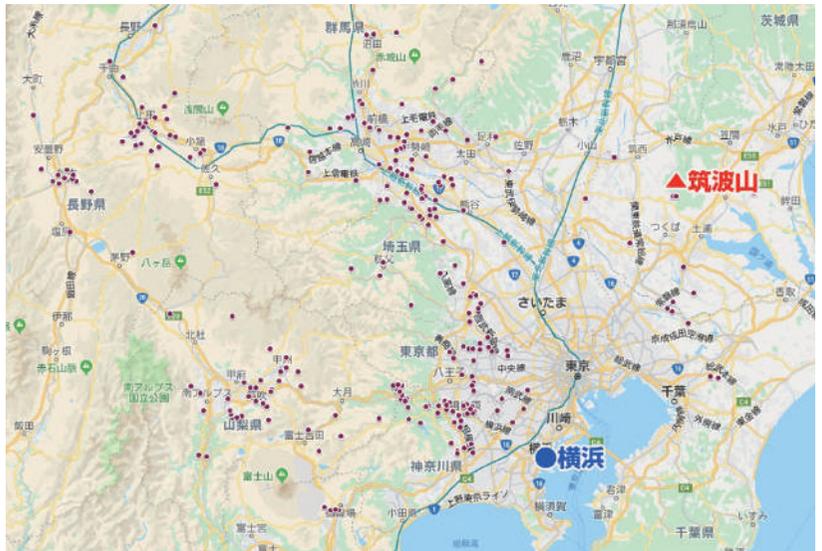
(映像作家／民俗研究者)

## (五) 蚕影信仰は夢のお告げから 始まった

養蚕とは、蚕蛾の幼虫を育てて、蛹の入った繭を収穫するという農業です。その後、繭から繰り取られた生糸を使って絹織物などが作られます。

「ある夜の夢に我に食をあたへよ後かならず汝のために恩を報ずべしと、夜明てからびつを開きければありし御形は水とけして、小虫となってありけり」(「常州蚕影山略縁起」慶応元年)

これは蚕影神社の由来を伝える金色姫伝説の一部です。天竺から漂着した金色姫(十歳ほどだったという伝承もある)を権太夫夫妻



蚕影神を祀る寺社の分布図(シルク民俗研究会カイコログ)



蚕影神社掛軸

が助けたのですが、金色姫は残念なことに亡くなってしまいます。その夜に権太夫が夢を見た。その中に金色姫が現れて、恩返しのために小虫(蚕)となったという部分です。それから権太夫夫妻は、金色姫から繭を収穫するまでの技術を学び日本において初めて養蚕を行ない広めたということで、蚕影山大神の掛軸には、金色姫とともに養蚕祖神として描かれています。

この夢のお告げから始まったともいえる蚕影信仰は、江戸時代から国内に広まり、特に養蚕が国策として盛んに行なわれた明治時代になると蚕影様を守護神として祀る養蚕農家や地域が増えていきました。

現在、その名残をとどめている寺社などの場所は三百ヶ所以上が確認できます。弥生神社境内に祀られている蚕影神社もその一つです。北は山形県から西は京都府までの分布がみられますが、その多くは図にあるように関東から長野県にかけて集中しています。これらの多くは、筑波山麓にある蚕影神社(本社)、あるいは別当である桑林寺から分霊を受けて祀られたものと思われます。分布から特徴的にかがえることは、群馬県や長野県など養蚕が盛んに行なわれた地域から貿易港である横浜に向けて生糸などが出荷された「日本のシルクロード」とよばれ

る一帯にあること、そしてそれらは山間部などの畑作地域であることが分かります。稲作に向いていない斜面地や台地、河原などに桑畑が開かれ、養蚕は現金収入を得られる農業として奨励されました。その時代に暮らしを支える信仰のひとつとして蚕影神が迎えられていったのです。

茨城県取手市にある大聖寺は、不動明王を祀る真言宗の寺院です。この境内に「蚕影山神社」と刻まれた石塔が建っています。この寺の信者であった中村熊次郎が明治三十三年に建立したものです。中村家は江戸時代後期から清酒醸造をしていましたが、弘化元年から養蚕も始めています。明治時代になり熊次郎の代には、勸業博覧会に出品した繭が褒状を受けるほどに養蚕で成功しました。その資産を使って学校を建設し寄贈するなど、地域開発に貢献する名士として知られた養蚕家だったのです。

そんな熊次郎がどうして蚕影山を勧請したのかは記録がありませんが、教育や福祉など人々の生活の基礎を築き地域を豊かにしていくためには、養蚕・製糸業の発展が不可欠であると考え、まだ未熟であった養蚕業とその従事者の暮らしを守りたいという思いから勧請したのではないのでしょうか。



↑ 蚕影神社絵馬

唐櫃（からびつ＝棺）を開けて見る夫妻

← 大聖寺境内に立つ

「蚕影山神社」と刻まれた石塔

←← 神奈川県養蚕センターの跡地に残る  
供養塔（海老名市）



また同じ境内には、熊次郎が明治三十四年に建立した「蚕霊供養塔」があります。この銘文には、「明治二十四年から製糸業を営むが、蚕虫を踏み殺し、蛹を蒸し殺す数はおびただしく、国家繁栄のためとはいえ人情として忍びがたし。ゆえに、この蚕霊塔を中村家の氏神である不動尊に立てる」とあります。蛹が成虫になり、繭に穴を開けて出てしまうと、製糸場で繭から糸を繰り取る作業に支障があるため、事前に繭を煮て蛹を殺すこととなります。製糸場では、その数が膨大になるため、殺生に耐えられないと養蚕をやめてしまう農家もありました。そのため、事業者や養蚕組合などがこうした石塔などを建てて、その前で慰霊祭が行なわれていました。

権太夫の夢に現れた金色姫は、小虫＝蚕となり養蚕を伝えました。その命をいただいて、日本は大きく経済発展を遂げ、途上国から先進国へと飛躍する基礎を築くことができたのです。また産業の面だけでなく、信仰と結びついた文化の面でも人々の暮らしを豊かに彩ってきました。今では、まるで一夜の夢のように忘れられてしまったシルクの時代ですが、それは決して遠い昔の出来事ではないのです。

シルク民俗研究会カイコロジー

HP : <http://www.kaikologs.org/>

# 本を読む。小河洋友

(おがわ・ひろとも／図書館司書)

「夢」を考える五冊を選びました。彼方から届くメッセージか、脳による記憶処理の現われか。「夢」の捉え方、そしてその影響は時代によってずいぶん異なるようです。「夢」を考えることは、「現実」を裏打ちするものは何か、と問うことのように感じました。

## 夢の日本史

劇団四季から世界へ

酒井紀美／著

勉誠出版 (2017.5)

## 夢の分析

生成する〈私〉の根源

川崎克哲／著

講談社 (2005.1)

## 悪夢障害

西多昌規／著

幻冬舎 (2015.9)

## アリスのふしぎな夢

ルイス キャロル／著 マルト

スガン・フォント／イラスト

すえまつ ひみこ／訳

西村書店 (2010.5)

## 夢ってなんだろう

たぐさんのふしぎ傑作集

村瀬学／著

杉浦範茂／イラスト

福音館書店 (1989.3)

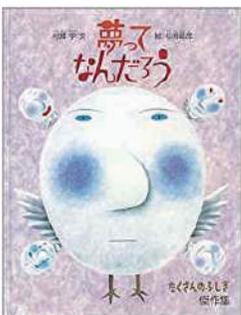
文章や絵画に様々な形で記された日本人の夢。本書ではその記録を手がかりに当時の人々が夢をどのようなものとして認識していたのか、また夢をめぐるどのような「文化的装置(仕掛け)」を作り出してきたかを探ります。「夢語り」から見たもう一つの日本史です。

古代には神託として「意味」そのものだった夢。科学的な世界観が定着するにつれ、睡眠中に処理される脳内ノイズとみなされるようになっていったとのこと。仕切りのないトイレの夢、海に落ちて沈んでいく夢・・・古代から現代に至る人々の夢を辿り、近代的な主体の誕生を探ります。

悪夢にうなされて疲労が抜けなかった経験は誰しもあるのではないのでしょうか。「極度に不快な夢を繰り返して見ること睡眠が妨げられ日常生活に支障が出る」病を「悪夢障害」と呼ぶとのこと。うつ病の前兆なのか? ストレス過多なのか? 悪夢について網羅的に考える一冊です。

「不思議の国のアリス」を子ども向けに書き改めた絵本。原著者であるルイス・キャロルが手がけています。もちろん白ウサギが一匹大きいそぎでかけてきて、上着のポケットから時計をとり出す…あのシーンから物語りがはじまります。アリスのふしぎな世界を美しい絵で楽しむことができます。

刊行以来子どもたちに読み継がれてきた名作絵本です。庄子や聖徳太子が見たふしぎな夢、現代の子どもたちが見たおかしな夢を紹介しながら「夢ってなんだろう」と考えを膨らませていきます。子どもたちの見る夢を大切にしてほしいとのメッセージです。



花椒の夢

ホアジャオ

谷口明子 (陶芸家)

花椒、と聞いて、「ああ、あの痺れるやつね」とピンとくる方はどれくらいいらっしやるのだろうか。日本で知られる代表的な使い方は麻婆豆腐に入れるというものらしいが、私はよく知らなかった。先日中国の四川省あたりに行つて、道端の店で適当な麺を食べていたら次第に唇が痺れてきて、それはこの花椒による作用だったらしいのだ。辛さの質も、トウガラシのようなひりひりする辛さとは違う爽快感のある辛さで、香りもとてもよく、大好きになって花椒の大袋を手に入れて帰国した。しかし大袋など手に入れたものの、一度にそんなに大量に消費できるものでもなく、しかも早く使わないと風味が落ちてしまうのでは、との強迫観念にもかられ、今、毎日あらゆるものに投入してみている。挽いて納豆にまぜる。卵かけごはんにまぜる。チーズトーストにふりかける。丸のまま焼肉と一緒に口に入れてみる。生野菜といっしょに口に入れてみる。パスタソースにも入れ、ケーキにも混ぜ込み・・・漬物やオイルの香りづけ・・・まだ出来ることはあるだろうか。ふりかけ？スパイスティー？

・・・つい花椒のことだけを長々と書いてしまったが、もうひとつ、この中国旅でいくつかの仏像や神々の彫られた石彫を見て改めて強く感じたことがある。それは、神仏というのは、人間を助けてくれるために存在しているのではないな、ということだ。少なくとも積極的に気をきかせて手を差し伸べてくれるとか、こちらが願ったことをわかりやすくかなえてくれるとか、そういう一筋縄な救済はしないだろう、



痺れる麺が出来るのを待つ席からの眺め  
(中国・重慶)

というのは彼らの尊顔をじっくり拝めば拝むほど確信となっていた。余計なこととはしない。無駄に残酷なこととはしないが、今の感覚からすると残酷に感じられることを彼らの当然として為すことは多々ある。そう思わせる顔をしている。野生の動物や、昔の人間は、少しこれに近い質があるような気がする。そして、その存在感に触れて私は気持ちに風が通るのを感じ、そういう気持ちにさせてくれることが救い？と思ったりした。

子供の頃、寝る前に観たい夢をプログラムしてその中に入って寝ればプログラム通りの夢が見られるカプセル状のベッドがあったらしいのに、とずっと思っていたが、もしそのようなベッドがあったとして、それによって見る夢は単なるわかりきった娯楽でしかない、と今は思う。やはり夢は自分ではコントロールできず、神仏のような超越した何かが現実の磁場を狂わせたもうひとつの世界に遊ばせてもらう時空であってほしい。ただ、願わくばそこに味覚や嗅覚等も同期できたら最高ののだが。花椒の痺れなども。(文・写真/たにくち・あきこ)

Akiko Taniguchi

HP : <http://kinokocoffee.bitter.jp/>

# トルコ女性の手仕事

上岡 和江



私はここ数年の間に、夫の仕事の都合でトルコに何度か一緒に行く機会があり、沢山の友達と家族ぐるみで親しく付き合うようになりまし  
た。トルコはとても親日的な国だと耳にしてい  
ても、イスラム教に今まで全く縁が無かったの  
で、初めはうまく付き合えるかどうか不安もあ  
りました。ところが、トルコ女性の手先の器用  
さと、とくにスカートの縁に編み付けるレース  
の素晴らしさに気が付いてから、私はすっかり  
トルコ女性のファンになりました。彼女らの人  
柄や手仕事について、私の知り得たことをお話  
します。

アイシャと言う名前で、公民館のような所（以下、公民館と呼ぶ）  
で地域の女性達に織物を教えているそうです。アイシャをはじめ集まっ  
ている人達は英語を話せないけども、見学くらいはできるし、事情は  
話しておくからとNさんは言ってくれました。翌日に早速行くことに  
したのですが、それとは別に、Nさんの店だった室内に沢山置かれてい  
る色々な物が気になったので、見せてもらいました。私は美しく染色  
された木綿のガーゼのスカートと、その縁取りのレース編みの繊細さ  
に目を奪われてしまいました。（写真2）

始まりは、アンタルヤに滞在中に出会った、N  
さんという日本女性です。ガイドブックに手織  
りの店を開いている人と紹介されていたので、  
尋ねてみました。地図を見ながら探し回った結  
果、多忙のためにもう営業していないというN  
さんの店を探し当てました。（写真1）Nさんは、  
自分もう織りを見せることは出来ないが、興  
味があるならと知人を紹介してくれました。

Nさんはトルコ各地でスカートを収集・研究して、本も出版してい  
る方でした。（写真3）レース編みのことをオヤと言い、地域ごとにオ  
ヤには違ったパターンがあつて、また女性たちの心情を表す意味もあ  
ると教えてくれました。イスラムの女性は人前で、あまり自分の意見  
を言わないので、その思いをオヤのパターンで表したりするのだそう  
です。例えば家庭内で辛い思いをしている時は、トウガラシのパター  
ンのスカートを被るというように。

トルコもかつては養蚕が盛んだつたので、村で取れた生糸を使って  
オヤの糸にしていたようです。日本語でオヤについて書かれているN  
さんの本や、何枚か収集品を分けてもらい、アイシャの公民館の住所  
を書いたメモをもらつてNさんのもとを去りました。  
ホテルに戻つてから、Nさんの著書に目を通すと、オヤにもかぎ針を  
使うものやビーズを編み込むもの、縫い針を使うもの等の種類があつ  
て、縫い針による縁編みが特に細工が細かくて素晴らしいことが分か  
りました。縫い針のことを「イーネ」と言うため、「イーネオヤ」と呼  
ばれるものです。

翌日は、タクシーで朝から公民館に向かいました。運転手も英語は  
通じないので、住所の書いてあるメモを見せ、後は手振り身振りです。  
公民館はコンクリート作りのちよつとした学校のような所でした。Nさ

んによればここは、女性のために託児もして、手に職を付けさせるための教育施設ということでした。読み書きも教えているようです。因みにアイシャも読み書き出来なかったのですが、勉強して短時間の間にスマホで文字が打てるようになったのだそうです。公民館は二階が託児所、一階の一部屋はフェルトの加工、もう一部屋で織物を教えていました。

アイシャが織物の責任者で、五人ほどの女性達に小振りの絨毯の織り方を教えていました。まだ初歩らしく、ごく簡単な模様を織り込んでいました。皆が私に興味津々で、隣のフェルトの部屋の人達が熱々のチャイを持って、様子を見に来ました。高齢の母親を伴って来ている人もいて、部屋の中央の椅子にその老婦人が座っていたので懐かしい気持ちがありました。日本でも、老人や子供も含めて、一緒に同じ室内で過ごしていた時代は、それほど昔のことではありません。フェルトの生徒で少しだけ英語の単語を知っている人がいて、話をしに来ました。彼女が他の人達に対して、とても得意そうな顔をするのを、ほほえましく感じました。こうして言葉の通じない中にと、英語だけが頼りで心細い限りです。さて、そうこうしている間に早めの昼食時間になりました。また熱々のチャイと、焼きたてのパンや桑の実のジャム、塩漬のオリーブ等持ち寄った物を広げて、皆で食べるようになりました。私も日本のお菓子や、ホテルから各種のパン、チーズ、果物などを持って行ったので、テーブルは賑やかになって、わいわいと楽しい食事をしました。女性達の中には、自分の中にあるイスラム教の人達への垣根がどんどんと低くなっていききました。(写真4)

昼食後、アイシャが身振り手振りで何かを話しかけてきました。簡単な絵まで書いて、どうやら自分の家に招いてくれるようでした。行ってみたいとは思いましたが、どのくらいの距離があるのか、バスを利用するのか、その場合帰りの手段はどうなるのか、わからないことばかり

でした。ふと外を見ると、今朝利用して帰ったはずのタクシーが停まっていた。帰りにも乗せたいと思って待っていたのかもしれない。そのタクシーにアイシャも乗せて、ともかく行くことにしました。

初めはもつとずつと近い所かと思っていました。道はほとんど田舎道になり、風景も町から何も無い郊外に変わりました。途中でアイシャのサービス精神か、子供達が水浴びている美しい泉で車を止め、記念撮影。次には湖畔にバーベキュー設備などもある湖の見学。言葉が通じない不便さを感じましたが、前日にNさんが「何かあったら電話をください。」と言ってくれていたもので、それほど心配はしませんでした。

一時間以上走ったかと思う頃、やっと村があつて誰かの家に招き入れられました。アイシャの友達か親戚なのでしょう。遠慮をしている余裕もなく、靴を脱いで上がりました。室内は美しい敷物が敷き詰められ、壁際には中身をぎっしりと詰め込んだ細長いクッションが並べられていました。整頓されていて清潔で、とても居心地のよさそうな室内で、中年のご夫婦が食事をしていました。

村でのアイシャとの交流は、イーネオヤのスカーフをたくさん見せてもらったりして、とても心に残るものでした。それはまた次回お話しします。(文・写真/かみおか・かずこ)



写真3 Nさんの著書



写真4 公民館室内の様子



霧にけむる沖家室島

## 魚名にみる瀬戸内の源平合戦

松本 昭司

僕の住む島は沖家室（おきかむろ）島。瀬戸内海で淡路島、小豆島について三番目に大きい島の周防大島のまた島。かつては航路でつながっていたが、三〇年くらい前に橋でつながった。

元々は大島郡に四つの町であったが現在は合併して周防大島町となった。古事記にも名が登場する古い島だ。イザナギノミコトとイザナミノミコトが国生みをした一つの記述がある。大島は金魚の形をしている。僕の住む島はその金魚の尻ビレの真下にある。神が大島を生み、その大島が神の孫を生んだ、それが沖家室島。決して神が糞をしたのではない。

この島は面白い歴史を持っている。かつては海賊の島であったという。今も地名に海賊浦がある。秀吉の海賊禁止令でいったんは無人島になるが、関ヶ原の合戦以降、伊予の戦国大名河野氏の没落後、その家来であった海賊衆十数人が移り住んで今に至

る。だからその後の歴史は四〇〇年あまりと割と新しい。その家々は今も代々と続き、同級生にも海賊を祖先に持つ。当の僕の松本家も伊予から渡ってきた。三階松の家紋からたどると河野家のその前の家筋のようだ。

我が家は漁家。父は今年春に九三歳で亡くなったが、一本釣りで年中真鯛を追った。僕も幼少から船に乗り、小学六年生のころは自分用の動力船も持たされた。釣った魚は漁協に売り、専用口座もあった。水揚げ場では、伝票は父が松本春久なので「マツハル」、僕は昭司だから「マツシヨウ」と魚掛け（検量）の職員が切った。子どもながらに大人扱いされて誇らしかった。

この島は山口県の最南端に位置し、豊後水道から流れ込む黒潮が島を洗う。暖流系なので熱帯系の魚もいて、にぎやかだ。そんな中で、面白いことに気がつく。源平の名がつく魚が多いのだ。

例えば身体中に槍をたてた縞模様のミノカサゴをキヨモリと呼ぶ。コシヨウダイをトモモリ。貝がらを背負ったヘイカガニ（これは学名も同じか）。ベンケイガニもいる。凶鑑を開くと源平になぞらえた魚名が他にもたくさんある。一の谷の合戦で平敦盛を討つたのは源氏の関東の武将熊谷直実。アツモリウオとクマガイウオが同じトクビレ科にいるのは笑わせる。このほかにも九州ではタメトモハゼ、チンゼイシタビラメというのがいる。これは九州源氏鎮西八郎為朝の名をとったものだろう。

漁法が面白い。戦前まで行われたいた、鳥が空からイカナゴやイワシなどの小魚を追ひ、浮いてきた魚を漁師が捕獲するアビ漁。このアビをヘイケダオシと呼んだ。トリマワシともいう。鳥回すという意味か。地元の方言に「追いまわす」をトリマワスという。「アイツは気に食わん。トリマワシてやるー！」と。

少し前に、関門海峡へ降り立った。狭い海峡に大型船がひしめき合う。ここは壇ノ浦パークキングエリア。源平の最後の決戦となったところだ。幼帝安德天皇とともに海に沈んだ平家の大将平知盛。

我が沖家室島の近くに知盛の城があった。その地区名をジョウヤマ（城山）という。ふもとには城山小学校がある。この知盛が築いた島末城は源平合戦の終盤（一一八四年）に決戦を迎える覚悟で周防大島に築い



茹であがったウチワエビ

沖家室島で暮らす猫たち



「鯛の里日記」<https://tainosato.hatenablog.jp/>  
周防大島町沖家室島の民泊体験施設・居酒屋の日常と  
宮本常一による民俗学の学びを書いています。

た山城である。鎌倉時代の史書吾妻鏡には「大島は平氏謀反の時、新大納言（知盛）城を構えて居住旬月に及ぶ・・・」とある。そのためだろうか、周防大島には赤い鳥居が多い。地元では宮島さんと呼んで親しまれている。

壇ノ浦の地元漁師は海に散った幼帝安德と平家一族を偲んで正座をして鯛を釣るといふ。ここでは鯛をヘイケウオと呼ぶぞうだ。

よくみると、瀬戸内に源氏の名のつく魚がない。

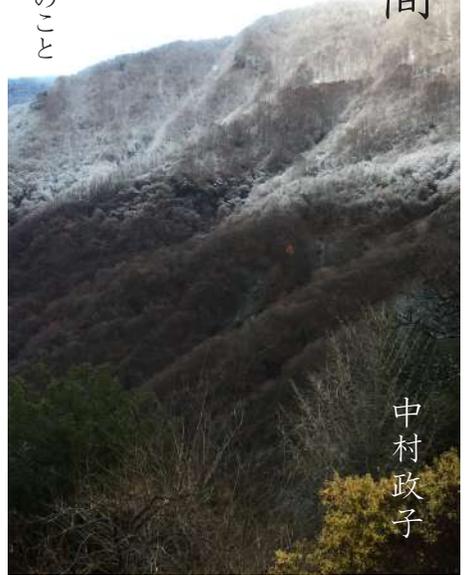
ドラマをみると、とかく清盛や頼朝が憎々しく描かれ、超美男子は源九郎判官義経。この判官びいきに対して瀬戸内は平家びいきに間違いない。

平安の世は、平家を射った源氏が鎌倉幕府を開いて鎌倉時代を迎えた。しかし、今の世、瀬戸内の海の底の合戦は平家に軍配アリ、といったところだろうか。

（文・写真／まつもと・しょうじ）

# 山の時間

中村政子



シズさんのこと

シズさんは自分の田んぼが大好きだ。そこにはシズさんをワクワクさせる世界がある。婚家の舅から米作りの主力を大工の夫に代わって受け継いだ時、彼女は田の畔にどんな植物が眠っているのかを探った。というのも、それまでは幸運にも刈られずに花期を迎えられたものだけ、その花を見る機会があったものの、芽が出たのは知っていてもその花まで見届けることのなかった植物があるからだ。それが見たいがために、シズさんは田の畔を刈り払い機ではなく鎌で手刈りした。

春の定番、オオイヌノフグリ・ホトケノザ・ハコベ・フキノトウ・スミレのにぎわいにはじまり、田んぼの畔に見ることは珍しくなったシヨジョウバカマやフデリンドウやワレモコウ、さらには絶滅危惧種のスズサイコなどなど。そこには当然、虫も蛙も蛇も集まってくる。生命の彩りも循環も息づく世界がそこにある。そんな生き物の世界に眼を細めながら、シズさんは田の仕事に精を出す。こんな

花や虫たちを見ていると、除草剤も殺虫剤も撒けなくなった、とシズさんは言った。

そのシズさんに、ある時、米を分けてくれないかと頼んでみたことがある。真正正銘の無農薬米である。それに対してシズさんはこんな話をしてくれた。やはり米を譲ってくれという知り合いがいて、三〇キロ取り置いたことがあった。値段は市価より少し安くしていた。その知り合いはなかなか取りに現れず、再三の催促の後にやって来たが、買ってやるといわんばかりの態度にシズさんはひどく傷ついたと。市場に出回る米と同じに思われるのは、正直悔しかったに違いない。それ以来、米を知り合いに売るのはやめた。手間も暇も惜しまず心を込めて作った米に、値段なんかつけられない、とシズさんは私の頼みにそう応じたのだった。シズさんの語ったことは胸に深く沈んだ。

シズさんの米には確かに値段なんかつけられない。そう考えてみると、自分の周りには値段なんかつけられないものがいっぱいある。北澤のおじいさんが作ってくれたワラヅウリ。小糸さんの手作りコンニャク。娘の編むあったかい毛糸の靴下。会うたびに友人たちのくれる畑の野菜。自分の生活の中に、値段などつけられない価値あるものの占める割合が、思ったより大きかったことに、シズさんの言葉で気づかされた。生かされている。

先日のこと、ムシロを織る機の寸法を測らせてくれと、シズさんが大工の連れ合いと一緒に私を訪ねてきた。その手にシズさんは米を抱えていた。

## ヤスエさんを悼む

移住者の多い集落の中で、数少ない元からの住民のうち、一番若いヤスエさんが亡くなった。

ヤスエさんは長年の斜面の山畑での重労働がたたったのか、だいぶ前から膝が変形し歩くのが難儀そうだった。それが一年程前だったか、尻餅をついた後歩けなくなり病院に入院した。退院してからも車椅子生活を余儀なくされ、外にいる姿を見ることはなくなった。つい最近になって、股関節の手術をするためにまた入院したと聞いていた。それが感染症を引き起こすことになり、肺炎を併発して急逝したのだった。

ヤスエさんといえば、私たち移住者にはとても厳しい人だった。トーンの高い声で文句を言われることが多く、私は秘かにスピッツみたいな人だなど思っていた。失礼な話で恐縮である。キャンキャン吠えるし、油断していると咬みつかれる。目が大きくて意外と澄んだつぶらな瞳で、それもスピッツに似ていなくもない。正直なところ、なるべく顔を合わせることを避けた人だった。

文句の中味は畑が草だらけなこと、集落のしきたりが守られていないこと、私たち移住組の子供や飼い猫が粗相することなど、口を開けばまず文句と思って間違いないくらいだった。ヤスエさんにしたら、私たちのやり方はまず手ぬるい。それだけガミガミ言えるのは、

自分がぬかりなくやることに努力を重ねてきたからだ。そう、ヤスエさんは本当に働き者だった。

長年寝たきりだった姑の介護を続け、それから解放されるや夫は村の議員になり、周囲に頭を下げることが増え、その夫が病に倒れると看病と農業を一人で任されることになった。今考えれば、ヤスエさんは働きづめの一生を送った人だった。それだから、私たちに向けての文句は、うつぶん晴らしでもあったのかもしれない。

そのヤスエさんが、歩けなくなつてからはすっかり家の中の人になり、日射しや風にさらされた農婦の顔が、色白のおだやかな表情に変わっていた。久しぶりに会った時に、ああ、この人はこんな顔だったのかと驚いた。

その後会うこともなく、この計報に接することになった。それを知った翌日、集落内の路上でヤスエさんの娘に声をかけられた。雪を冠った山を母にみせてあげようと思つて、とカメラを手にしていた。病院から戻ってきた物言わぬヤスエさんは、「本当にキレイな顔をしているの」と娘は教えてくれた。

つらい一生を送ったかもしれないが、娘の話を聞いていると、子や孫たちに大切に思われていた私たちの知らないヤスエさんの家庭での姿が見えてきて、どこか安堵の胸をなでおろすのだった。

(文・写真／なかもら・まさこ)

## 金柑

きんかん



荒谷  
渚

幼い頃からよく遊んだ祖父の家の庭には、昔から様々な植物がありました。中でも、現在も毎年たわわに実をつける金柑の木は、私が特に親しみを感じる植物の一つです。その場ですぐプチンともいで甘い皮ごと齧って食べられるところが、さながら自然のおやつといった感覚です。

金柑は、中国原産でミカン科キンカン属の果樹です。小さな蜜柑のような実をつけることから、別名「ヒメタチバナ（姫橘）」とも呼ばれます。英名は「Cummquat（カムクアット）」という、日本人には発音しづらい名前ですが、金柑の広東語での発音が元になったそうです。

金柑の花言葉は「感謝」、「思い出」です。その由来は、金柑が日本にやってきた経緯にあると言われています。

金柑がいつ頃日本で広まったのかは諸説ありますが、その昔、難破した中国の船を助けた際に、助けてもらった御礼にと乗組員がく

れた金柑の種を撒いたことが、日本全国に広まるきっかけになったそうです。

現代でも喉飴が一般的に売られています。金柑は古くから咳止めや喉の痛み止めとして用いられてきたそうです。私の家では、祖母がよく金柑の甘露煮を作ってくれるのですが、「体に良いから」と冷蔵庫を開けるたびにについつい罪悪感なく摘み食いしてしまいます。柑橘類の皮にはビタミンCが沢山含まれていますので、皮ごと食べられる金柑は、風邪をひきやすい冬場にビタミンCを美味しく摂ることができる、ありがたい果物ですね。

きっと日本中の金柑の木には、その昔から様々な人々の優しさや思いやりに溢れた思い出が詰まっていることでしょう。新しく建てられるお家にお洒落な庭木として植えられることはあまり無いかもしれない金柑の木ですが、こういった人々の生活に深く根差した樹木は、その恩恵を受けていることへの感謝の気持ちをお忘れずに、大切に後世に残していきたいものです。

（文・絵／あらたになぎさ）



弥生神社で開催しております宗教・文化講座。昨年一年間のご報告です。

令和二年、三年めがスタートします。毎回の講座もご予約不要。初めての方もお気軽にご参加ください。御案内は境内の掲示板やホームページをご覧ください。

\*ご案内はがきをご希望の方は弥生神社事務所までお問い合わせください。

# 弥生神社 宗教・文化講座



## 神道を考える



5月11日に、第一回「神道のお葬式—魂のゆくえ—」を開催しました。星川杉山神社 権禰宜 国学者の中村聡先生による二つのレクチャー。現在行われている神道のお葬式(神葬祭)について、また後半は江戸時代の国学の世界で語られてきた「魂」についてのお話でした。現在とこれからのお葬式について考えるとき、歴史を振り返ることの大切さを学びました。

7月13日には、「神道のお葬式—神々の物語と先祖の霊、神職たちのこころみ—」をテーマに中村先生によるレクチャー。幕末期の津和野藩にスポットをあてて、死後の魂に関する国学者たちの思想と国学者や神職たちによる神道を広める熱意とその活動を、他宗教との関わりや時代背景とともにたどりましました。祖先との繋がりという人々の心に根付く思想が、キーワードの一つにありました。また、津和野で奮闘した彼らが残した神道の

形が、今もいたるところに残っているという興味深いご指摘も。神道の歴史や思想は一つではなく、各地域に目を向ければ、よりリアルに各時代の神道の複雑で多様な様相が見えてくるようです。二回の講座では紙垂(しで)折りや祓詞(はらへことば)の書写も行いました。

そして大嘗祭を間近に控えた11月3日には、加瀬直弥先生より「大嘗祭(だいじょうさい)は何のために行われるのか」と題したレクチャー。天皇の御代替りにともない行われる一代一度の「大嘗祭」。その意味や内容を、前回行われた平成の大嘗祭の映像を観ながら、歴史資料をひもときながら学びました。

古代より、家々や宮中で行われてきた新穀のまつり。新嘗祭(にいなめさい)。その際に祀るべき神のこと。また、大嘗祭において天皇が行う祭神への神饌(しんせん)の配膳法や、その際に使う祭儀具の素材や作りなど、詳細に知ることができました。そして、大嘗祭が「秘儀」と言われていることの内実も。歴史をさかのぼり、新嘗祭や大嘗祭といったまつりを深く知ることで、新穀をめぐるわれわれの祖先の信仰やまつりのあり方を、素朴で深い稲作と日本人との関係を、皇室を通して引き継がれてきたまつりの内容や形を、よりリアルにイメージすることができました。

## 古代の土の器

福田健司先生による二回のレクチャーと、土器作りから土器焼きまでのワークショップとを合わせて四回の講座。

7月28日「祭りの器・暮らしの器～種類とカタチとつかい方～」をテーマに、一回めのレクチャーを行い、8月25日には「神社とかわらけ～古代の土器のつくり方～」をテーマに、粘土の積みあげ方から藁灰による「覆い焼き」、窯での焼成の仕方までを学びました。

9月15日にはよいよワークショップ「土の



器を作ろう」を開催。当日は、福田先生が灯明皿で灯りを灯したり、台付甕でご飯を炊いたりと実演をし、古代の生活文化を見て学んで味わいました。参加者の皆さんが作った土器の作品は、二週間ほど乾燥させてから「覆い焼き」で焼成。破損したものもありましたが、焼き色も様々な土器ができあがりました。

## スライドトーク

### 「Hodophylax 道を護るもの」



手製本の写真集「Hodophylax 道を護るもの」をめぐって写真家 林道子さんによるスライドトーク。7月27日と9月1日の二回、開催しま

した。獣としての“狼”の存在と痕跡を探りにいった奥秩父。そこで出会った自然や人々との出会いを通して人々の信仰の姿が浮き彫りに。林さんの狼との出会いから写真集製作へいたる過程がひとつの物語としてあり、通底するのは、林さんが抱く自然や動物に対する愛情や畏敬の念でした。

二回めは、林さんが多くの時間と心身を懸けたリサーチをもとに狼の民話や伝承にスポットを当てた内容。女優の松岡洋子さんによる4つの民話の朗読では、語られる世界に引き込まれました。みえないものを表現した映像と林さんの静かな語りから、その昔ニホンオオカミを敬い、畏れていた人たちの姿と心に思いを馳せました。

## 古代エジプト人の精神世界

和田浩一郎先生による連続講座。第四回めを1月27日、「賛歌・聖船・神—古代エジプトの祭り—」をテーマに開催しました。以降、「第3章：ナイルを渡る—葬儀のはじまりからミイラ作りまで—」（3月24日）、「第4章：死者を護り、死者を飾る」（6月1日）、「第5章：落ちた星と牛の脚—口開きの儀式—」（8月24日）、「第6章：墓を閉じる—空<sup>から</sup>の棺と足のない鳥たち—」（10月25日）、第9回には「獅子女神と七本の矢—年の終

わりのまじない—」（12月15日）と回を重ねました。おもに（「序章」から始まる）古代エジプトの埋葬についてのお話でしたが、このほか年には新年のお祭、年末には年の終わりの儀礼や護符についてのテーマもとりあげました。

毎回のワークでは古代の聖刻文字ヒエログリフをエジプト土産のパピルスに模写してカードに仕上げたり、パピルスの御守りを再現したりと、解説を聞いて学びながら制作をしました。



## 生と死をめぐる—民俗・考古編—

6月30日の「夏越(なごし)の大祓」を前にした6月22日、当講座の3回目「大祓(おおはらへ)～水ぎわの祭・土馬・人面土器～」を開催しました。玉井ゆかり先生より「大祓」について、人形や土器、土馬といった考古資料や文献資料を紹介しながらのお話。墨書されたさまざまな形の土器は生活の中であるいは神事でどのように使われたのか、胴部に描かれた「顔」の意味も含めて、古の人たちの営みを興味深く想像しました。



ワークは、「蘇民将来のミニ茅の輪作り」。備後の国「風土記」にある蘇民将来の伝説より茅の輪の由来を学び、実際に茅から茅の輪作りに挑戦しました。さまざまに願いを込めながらの製作。採れたての茅で青々とした茅の輪が完成しました。

## インドの社会と宗教

11月2日は、「インドの宗教のいろいろ」をテーマに、近藤光博先生によるレクチャー。インドという国の概要、宗教・社会事情、シク教やジャイナ教などインドに存在する個々の宗教について学びました。インドの人々によって「生きられる宗教」とは、親から引き継がれ習慣や文化となりアイデンティティをも形成するもの。そこで、「日本人は無宗教と言えるのか」という現代的問いも提示されました。12月14日は「ヒンドゥー教とはどんな宗教か」をテーマに。たっぷりのスライドでインドにおけるヒンドゥー教

の複雑な在りようを遺跡、家庭祭祀、路上、葬送の場などから多角的に概観。日本宗教との共通性などにも触れました。後半は、高校の倫理の教科書から始まって…ヒンドゥー教をめぐる日本の学的理解の段階を解説。印象的だったのは、複雑な事柄、現象を複雑なまま捉えることの大切さを踏まえたうえで、(単純な言説が幅を利かせてしまう現実に対して)、ヒンドゥー教とは?…という単純な説、モデルを提示する必要性があるということ。そして、学問における本質主義の怖さ、危険性を語るあたりは圧巻でした。次回は1月25日に「インドからイスラム教を見ると…」を開催します。

## 蚕の世界



5月5日に「真綿に触れる—祈りと手仕事—」をテーマに第一回を開催。上岡和江先生から、古典に記される真綿、神社の神事に伝わる真綿、皇室の養蚕の様子を学びました。古人の手仕事

の労、自然素材から編み出される生活の知恵と工夫に感嘆し、真綿の魅力を知りました。湯につけた繭玉から繊細な生糸が引き出されるさまや、真綿がどんどんと広がり布団状になっていくさまを見て触れて匂いをかいで、貴重な体験でした。

9月23日には、「生糸に触れる～糸を繰る技」を開催。上岡先生より蚕、生糸に関わる皇室行事や日本の風習についてのお話。そして実際に蚕からの真綿とりや、座繰り器を使って糸を繰る作業を実演、参加の皆さんもチャレンジしました。紡錘車を使っての糸紡ぎや、蚕から引き出す生糸をカップに巻き取りながらランプを作りました。

# 黒糖牛蒡ういろろ<sup>ういろろ</sup>

もっちりとしたういろろ生地と、歯応えのある牛蒡の取り合わせが面白い蒸し菓子です。独特の香りに馴染む黒糖で牛蒡を煮付け、水玉模様(ういろろ)に散らしました。



## 黒糖牛蒡ういろろ

(15×20cmの角型容器一個分)

※ういろろ生地

薄力粉 180g    上白糖 160g  
餅粉 80g      水 400g

※牛蒡の黒糖煮

牛蒡 1本  
黒糖 牛蒡の重量の50%  
醤油 少々  
生姜 ひとかけら

### 【牛蒡の黒糖煮】

- 1 生姜の皮をむき、薄切りにしておきます。
- 2 牛蒡の皮をスチール束子、または包丁の背で軽くこそげ、水にさらします。厚さ2mm程度の輪切りにし、一度茹でこぼします。
- 3 ②をザルに開けて水気を切り、鍋に移して生姜と共に分量の黒糖と絡めます。そのまま中火にかけ、牛蒡から出た水分で煮詰めていきます。
- 4 煮汁にとろみが出て、気泡が大きくなったら醤油を加え混ぜ、火を止めます。粗熱を取った後、ザルに開け煮汁を切っておきます。

・型の内側を水で湿らせラップをぴったりと敷き詰めるか、または薄くサラダ油を塗っておきます。

(ここでは耐熱性のタッパーウェアを使用しています。)

下準備



- 1 ボウルに分量の砂糖・粉類を計量し、泡立て器で攪拌しておきます。
- 2 分量の水を加えて均一になるまで混ぜ、ザル等で漉します。
- 3 1 割程度の生地を残して型に流し、沸騰を保った蒸し器で表面が固まるまで10分程蒸します。
- 4 残りの生地を流し、牛蒡の黒糖煮を散らします。
- 5 再び25~30分程蒸します。  
中央に串を刺し、生地がつかなければ蒸し上がりです。



粗熱を取り、冷蔵庫で冷やした後に型から出し、好みの大きさに切り分けます。  
密閉容器で保管し、冷蔵したまま4~5日は柔らかく召し上がれます。



### 【柿とレモンのういろう】

柿を角切りにし、薄く剥いたレモン皮のみじん切りと共に重量の30%の砂糖と絡めて一晩置きます。ザルに開け、さらに数時間水気を切った後に、前述のレシピ④の牛蒡のかわりに生地に散りばめて蒸し上げます。  
生地にはレモン果汁を加えます。(計量し、その文、水の量を減らします。)

シンプルな味わいのういろう生地は、季節に合わせて様々な素材の組み合わせを楽しめます。

### 【甘栗とコーヒーのういろう】

インスタントコーヒー8gを少量の熱湯で溶かし(分量の水から引いておきます)、生地に加え、④の工程で半分にした甘栗を散らします。

砂糖は三温糖またはきび砂糖に置き換えるとより風味が深まります。



弥生神社で開催する行事のお茶菓子にも登場します。

## 弥生神社 授与品

弥生神社では様々な授与品をお分けしています。今回は年始の縁起物を御紹介します。



紅白一本の江戸打ち紐と水引で破魔矢を飾りました。飾り結びは縁起の良い几帳結び・菊結び・叶結びです。ひとつひとつ心を込めて結いました。弥生神社オリジナルの破魔矢です。



ミニ熊手

弥生神社で手作りしました干支の繭玉人形付きのミニ熊手です。竹製の熊手に、松と梅、淡路結びの水引飾りをつけ、柄は麻で結びました。福をかき集めるといふ縁起物の熊手。今年の干支の子を繭玉で作りました。子のお顔、和紙の色柄は様々です。



沖家室の猫さんたちに会いに行きたいわ



社務猫き一こ

あけまして

おめでとーございませう



社務猫ちよろ

白い毛も素敵ねえ  
たまには変えて  
みたいわ

編集後記 「弥生」十七号が発行となりました。文章を寄せて

いただいた皆さまありがとうございます。今号のテーマは夢。眠りの中で会えないはずの人と再会したり、願望が叶ったり。そんな夢の続きが見たいと強く願ったり、悪夢の最中に眼を開けようと力を入れたりするものです。

「カムチャツカの少年がきりんの夢を見ているとき」……という詩の冒頭を思い出します。どこで暮らしていてもいつの時代も人は夢をみる。願いを託し生きる上での指針や支えにしたようです。物理的に願望が叶えやすくなり、思い描くイメージすら鮮明に創り出す技術がある現在。昔は夢も「生きる」世界であり、日常に取り込みより重視していたように思えます。

さて、弥生神社では昨年、たくさんの行事を開催しました。お越しいただいた皆さまありがとうございました。いつも御縁に感謝しております。紙面で紹介しました「宗教・文化講座」のほか、毎月の「大祝詞（おおはらえのことば）」書写会をはじめ、御守り袋作りや御朱印帳作りのワークショップ、また、節句にちなんだハマグリのお香袋や薬玉作り、シユノウ作り、季節に応じた熊手作りやユーカリリース作りなど。新年も年間通じて開催いたします。皆さまがお気軽に参加できますようご予約不要です。ふらりとお越しくださいませ。

季節の巡りの中で境内の自然も変化します。春には沈丁花が香り、桜が咲き乱れ、初夏には紫陽花、秋には銀杏の葉が鮮やかに彩ります。耳を澄ませばいつでも、視野を覆う樺の木の子葉が揺れる音、さまざま鳥たちの声も響きます。鳥居をくぐり日常の慌ただしさから少し離れて、心静かなひとときをお過ごしください。

(権禰宜池田奈)

印刷 文明堂印刷

編集発行 弥生神社

神奈川県海老名市国分北 二一三三三